

特 71

991

川田貞治郎著  
心練學

~~264~~  
~~973~~

301534-001-5

特71-991

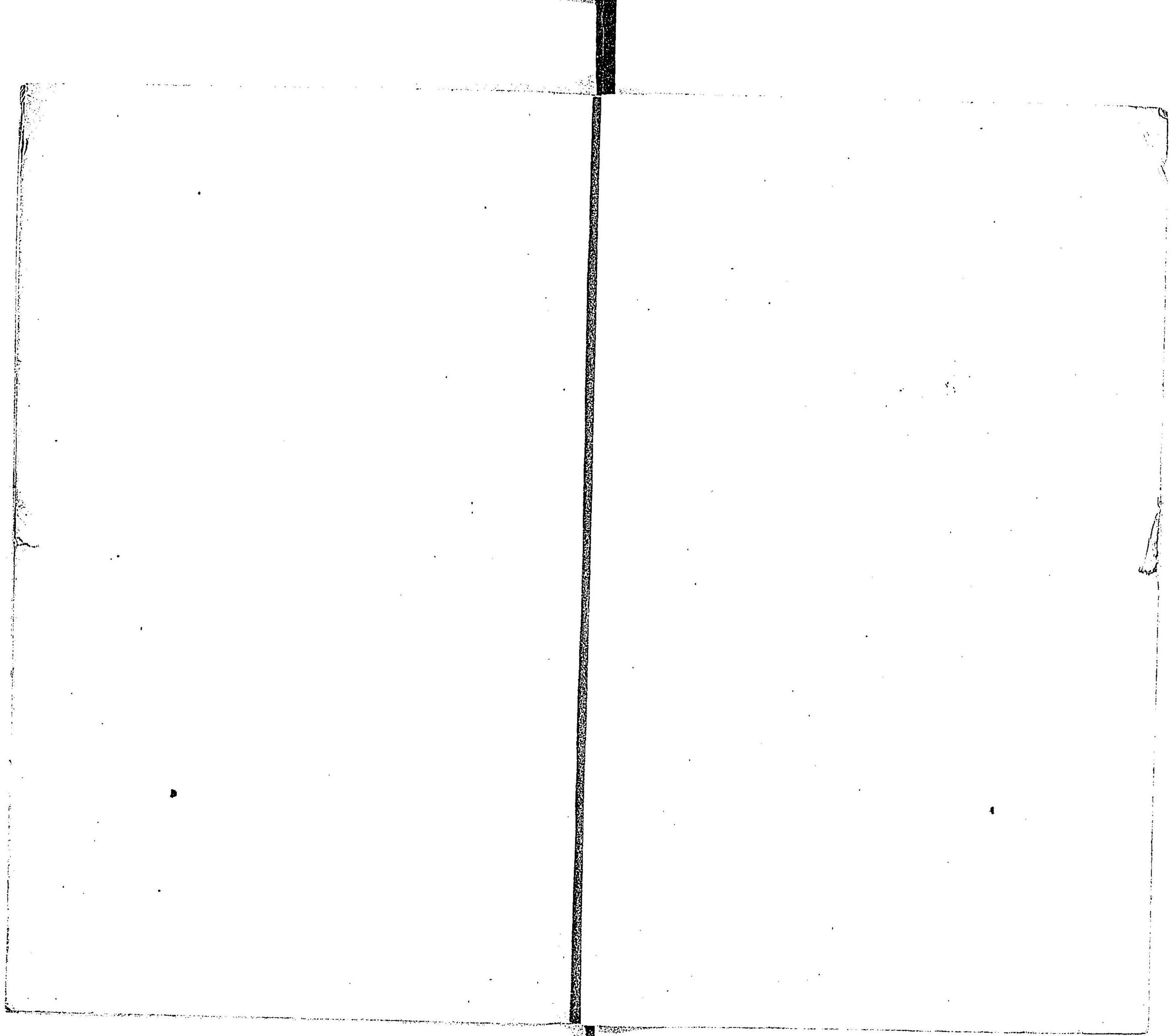
心練學

川田 貞治郎 / 著

M44.5

AAI-0001





特71  
991

心練學序文

心練學總論	第一章	第二章	第三章	結論
心	音聲	皮膚		

整法

音聲からの心整法

皮膚よりの心練

附錄

兒童身體及精神狀態檢查記錄票

明治  
44. 5. 17  
丙亥

## 序 文

この心練學の講義の目的は低能兒と不良少年との不正格なる心狀をして矯正せしむる術として、治療的教育を施すにあり。是れ實驗心理學と哲學との原理より研究せしものにして余は心的矯正術と稱す。學術的の名稱を以てすれば心練學と云ふ。其の準備學として心を静め正格なる心的運動をなさしむる爲めに目と耳と心との三條より心的狀態を整然たらしむる道を練るものとす。

明治四十四年五月

著 者 誌

心練學總論



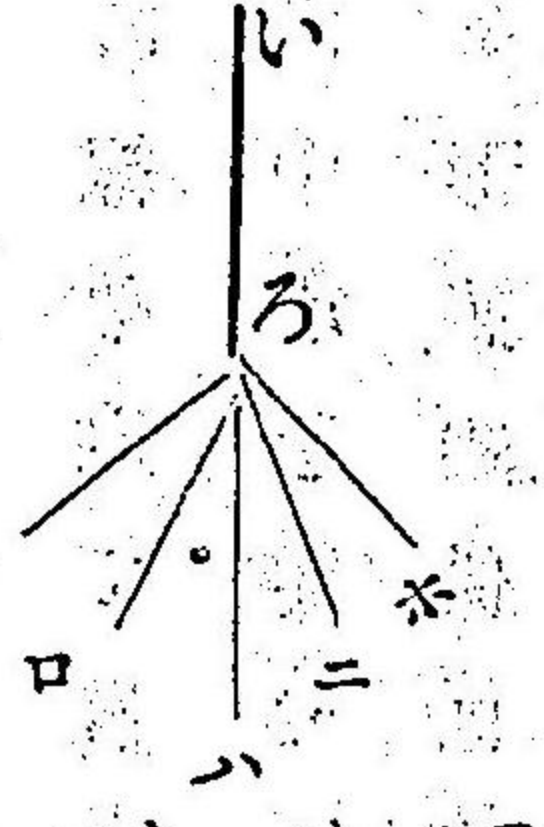
この爲めにこの方法を爲さしむるものとす。

低能なる、心的作用をして、密なる様に運動をな  
 さしむにあり。明瞭なる心的意識をして、これに  
 達せしむることを以て、必要とす。被教育者は教  
 師に表情を常に注意させ殊に教師は無我の觀

- 1 \_\_\_\_\_
- 2 \_\_\_\_\_
- 3 \_\_\_\_\_
- 4 \_\_\_\_\_
- 5 .....5

念を以て繪の如きものに、全注意をそ、がせ、一尺ほどの竹に七つの節ある、棒を以てこれに大小の線の如きものに静にこれに見つめさせ廣狹の觀念を生せしむる様に其の1、2、3、4、5、と、右より左の方にと、擦する様にして、そしてこれに被教育者に注意を傾かせしめ、其間彼等の心態は、單より雜の數と云ふものと廣狹の觀念との關係とを意識し得るものとなつて、幼稚なる意識に、觀念に作ることの、出來得るものである斯くして、吾人の目的の基礎が出来るものである。

(二)、点の意識は物の土台である、これ低能兒に對して必要なる、觀念を植付せしめ先づ簡單の概念につかましむるに必要なるものなるか故に、この單純なるものは点と云ふ觀念であると、吾人は知る。故にこれには如何なる法を以



て教育せしむるか云ふと、これである其れは点と云ふものに心沈めしめ思ふに現象界は萬物よりの一つの、印象である意識あることあらざるに關らす單々復雜なるものに、成るものなればこれを如何なる方法を以てイ、ロ、ハ、ニ、この点より意識させしむ我れと云ふものから萬物と云ふ係關をして、意識させしむる、心理作用をして、点々集めさすへきものなり。これか現象が期くして、起るかと思へば、人の性情は、点と云ふ一念に、あつて我れと云ふもの、一体に考へ及ば、この動きが他に及ぼす、この作用をしてイ、ロ、ハ、ニ、脳的と運動を起さしむこ、に吾人の精神ハ生存上胸に、運動を生じ力ある動きか生じ來ることである。心中に或る一個の考へか、眼を通して、深く達せしむる眼子

の開展の一つであるところ思はるれ。茲に教師ハ低能兒に對して、イロハホ、、、と數字を數へしめ胸に一種に光明か顯はれ來りこれこの刺劇より來るものはイロハニ、、、の信念が行くくハ深く沈んで來ることにあればこハ、に内包的思想に作用せしむることが低能兒の心的作用か活動しめ心練の点に至らしめ、吾人の能力をして、幾分かつ、作用する様になる。

心練の準備には吾人が身軀を眞立せしめ、支正を能くし、整理よく、心の内に確信あつて、いやみのない、位置を認めさせ目は眞線に標準をいらび、心靜に保たしめ、目と臍と心と直線を以て貫いで居る様に、吾人の心には三ツ要素より、心の中心を得せしめ、心長く保たしめ彼等の考に達せしめこの形態關係は形式と眞形と實在上の關係の如きもの、形

式かあつて實質と云ふ存在を有せしめば、只今までの整頓とは、重なる、形式にあつて深く實質と云ふ、重なる關係により心理學の研究より推理せしめねばならん正は体の正しうし整頓とは心のキチンとせしめ、この實質をして、得せしめたいところ思ふ。

## 第一章 心整法

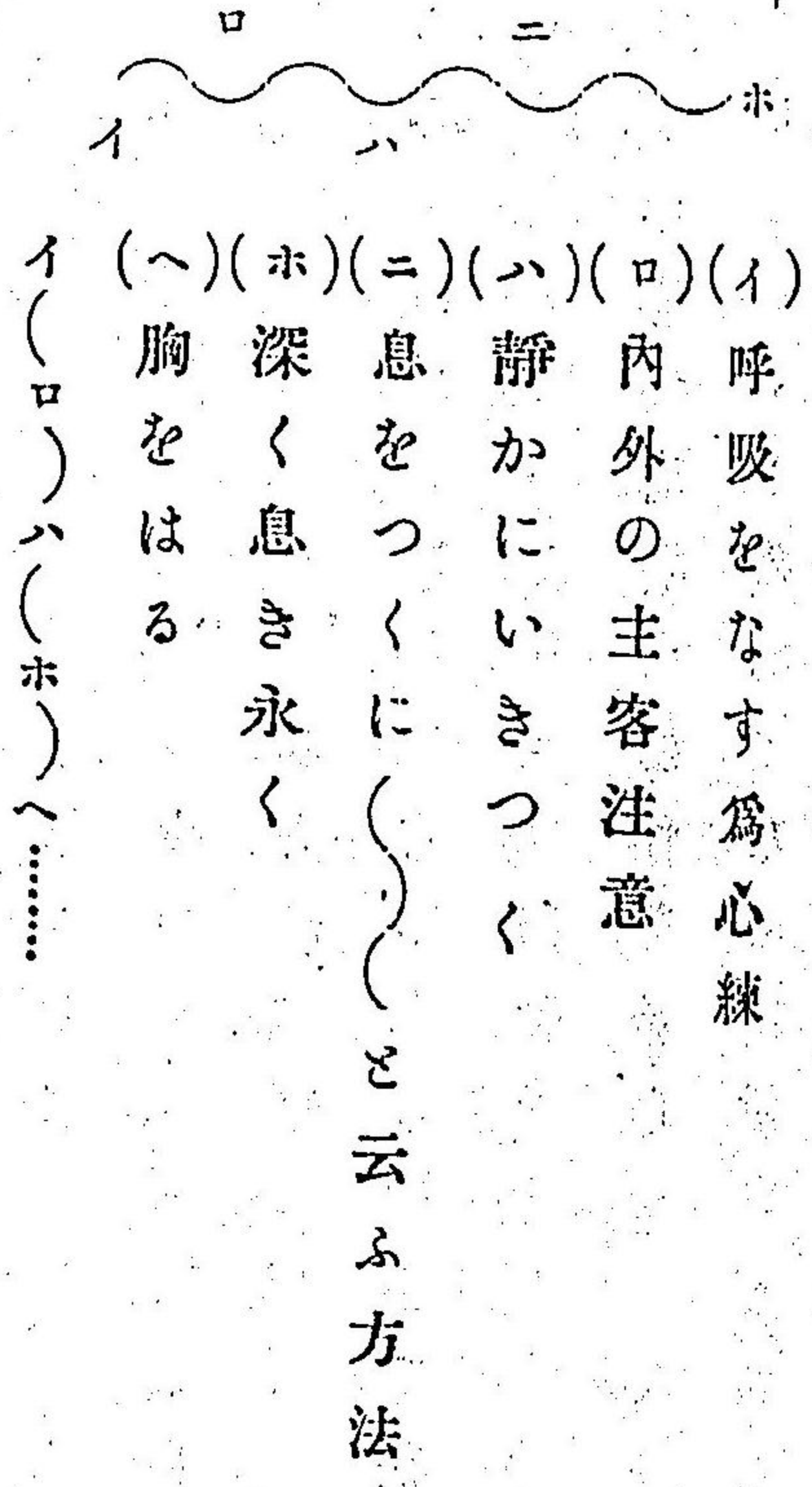
(一) 心整しするには——この直線をして想像せしめ低能兒をして、この具體的に、この直線をして認めしめ、直正な線をして、鞭をして見せ見つめさせ、被教育者には、目と型態の線に、直線に見つめさせて、十分に心を練るの義を想はしむる、時に心は何日のまにか、心に到達の出來るので、實質か正しくば、線の内容が腦の皮質に、連續せしめ、低能兒の心の組

織に連想させる内容をして具体的に深く考へさせることが必要である。

回数を重ねるに次へ彼等の心を細密にさせ、數的觀念をして數を増さしめ、低能兒の心的作用をして思ふ様に心練の歩を増さしめ、イロに鞭を以て靜かにすべらしめ、こゝに心狀をして心練せしめ其意に達せしめたいと思ふ。

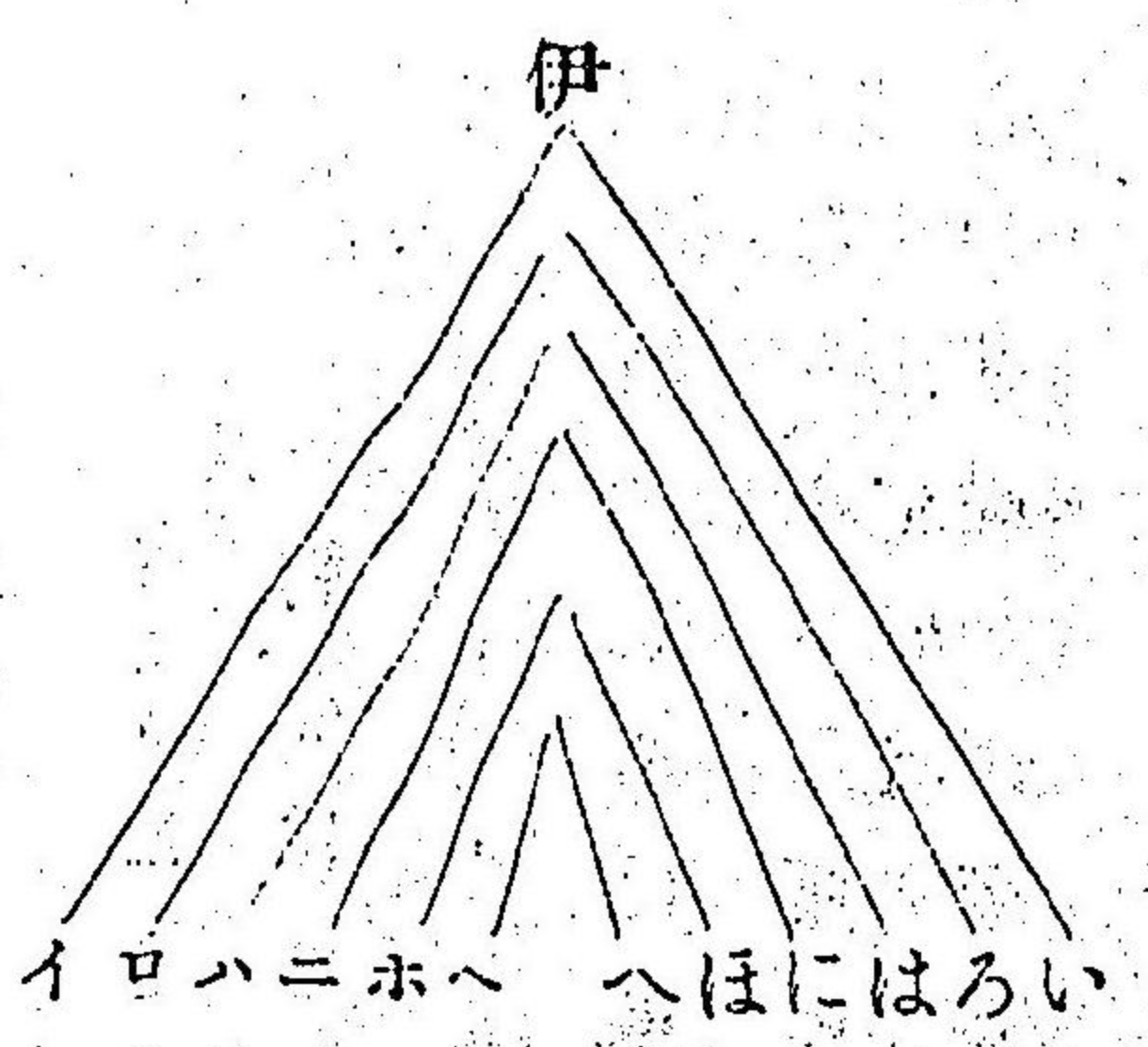
(二) 次きに起るべきものは思考の練習であるこれは秩序と連續との意味をして規則的に達せしむる爲めこれを行ふ人の健全なる思想にさい根本的思想を十分に深く心的運動に必要でこの(凹凸のある、この觀念を起さしめこゝに如何なる現象が吾人の心的問題となつて起つて

居るがこれをして現出する理由は如何であるか、こゝに論じよふと思ふ。この低能兒の眼には、如何様にこゝに關係するか、これを研究致しどう御座る。



(三) 圖解せしめば彼等の腹膜に、内容の偉大なるものゝ思想となり、小さな腦の内にこの方法を入るなれば、彼等に内低心の基礎が出来る。





る心と目との運動をなさしむ引續で被教育者をして伊よりいに口にハよりニに目をそくがしめ口より伊にと目を以て心情の高潔に徳性を發達せしむる爲めにハより伊はよりニ、一幾回となく、イ伊いを通してハと云ふ様にイロハニホいろはにはとこれにより腦の運動が起るので、これをして兒童の心的作用をして、自然なるものにせしめん爲めにこれを行ふものである。これより知覺を生じせしむ

イいと伊に於ける△三角形を想象せしめよ。伊ハ絶頂でイいとは廣い底邊を有し被教育者の腦裡にはこの開發的現象を起させ、こゝに、吾人の目的は心的發育に少からぬ影響を與ふるものとす。其方法は鞭を以てイより伊に達せしむ

る、心練にして、心の知覺の上に、このものとの關係より現象せしめ得るものとす。

第二章 音聲からの心整法

母音との性格との關係を云ふたら、母音なるものは、聲音學上、心情の整然せしむるには心的状態に至らしめ、不良の心狀をも、一種の矯正たらしむることを得て自ら至整たらしめ矯正たらしむる作用と能力とを有し吾人の習慣上矯正法として用ゐる。に必要なる方法と認められたり

ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア

アイウエオこの母音の整格に發言出来るなれば、吾





にては、注意を呼起さしむることなし故に練習運動の不充分なれば、心的發育の劣等なる低能兒にこの教育を施し矯正せざる可らず。鞭を以て一層早めにして發言させよ。目と聲と注意との關係に就て低能兒に目に見せ聲に顯はす、この困難なる現象ハ吾人の能く知る所に於て、これを外感と外表にある現象とが心的調和せしめ得ざるが爲めこの心練によりて鞭の早やさと目で見えて居るこの事實とが同時に活潑に動かなくてはならぬので、低能兒にとつては尤も、必要なるもので、あると認めます。のでこゝに學理的に謂へば知らす、の内に觀念基礎を構成せしめ知覺となり思想となり、習慣と智識と發育上大なる影響せしめ得へきものとす。

(一) 音聲より思考に誘ふ

吾人が思考と音聲との關係より、想像とに就き、練習せしむる方法として、其の一定時内に發言を口に唱へしめ、目では具体的に目の運動を致さしむ、これは前のアの母音の發言と等しく、發言機管をして、練習せしめ、強いてこれを活發せしむア、ア、ア、をして眼子を閉ちて潜伏せる思に入らしめ、然るに後にア(ア)アの時間を等しくせしめ、瞭明たらしめ、自ら彼らに自運動的に作用せしめ、順序よく、アの發言に重きを置き、これによりて、數の觀念を習はしめ、同時に順序をして、彼等の心中ニ植いつけん、この知覺、無限と云ふ想念形而上の無限と云ふものと進んでは道德的觀念に必要な問題をも、彼等に考へさしむることに至らしめ、得る方法にして、これか發言より形而上の問題に至らしむ、彼等に斯

くして偉大なる思考量に達せしめんとすの爲めなり。

吾人の考ふる所によれば、哲學者にしても、沈んで考へると

云ふことの如何に人物の心中をして、この形式と一つも異ふことなし。この能力

の發育心練の必要は、謂ふまでもなく

この方法として、彼等にこの發言

よりして、思考に誘ふこと、この必

要上アの發音をして、確實せ

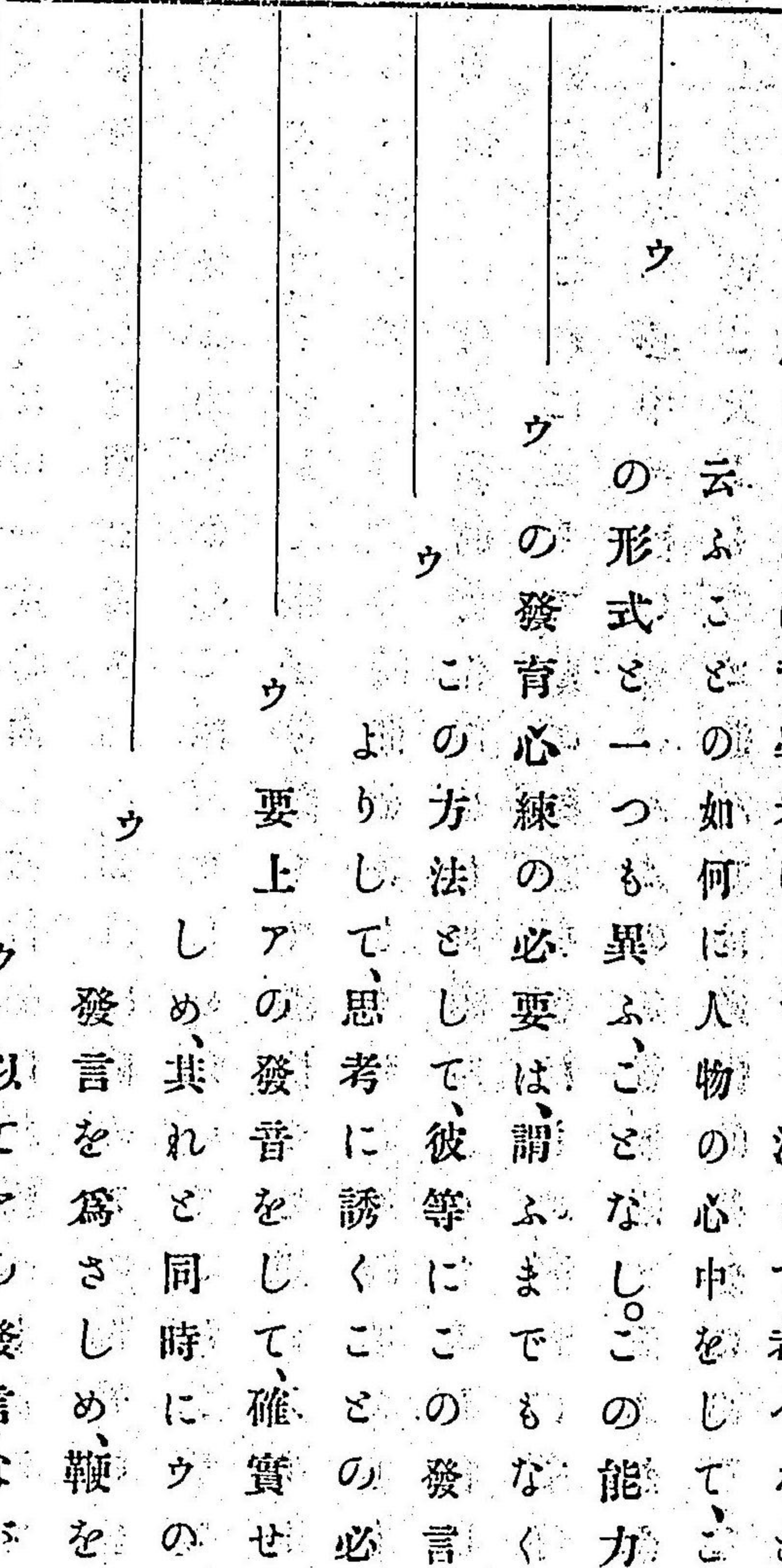
しめ、其れと同時にウの

發言を爲さしめ、鞭を

以てアの發言なが

らウに鞭を引き下ろしこれに目の運動と思想と云ふ形式をして斯くして彼等の心的作用を活發しめたいと思ふの

ア ア ア ア ア



である。呼吸との關係。身体が健全でありさいすれば思考は

(二)十分に發育して行けるものである。誰れであつても強い呼

吸の出来るものであれば必ず、アの母音を發言させて明瞭

である筈。異常兒にあつては、其の呼吸作用が弱い、従つて自

然腦力作用が不活發である故にこの活發なる呼吸作用を

學ばしむるにあり、即ち深呼吸をなさしむるにある。

所謂呼吸作用の練習である。

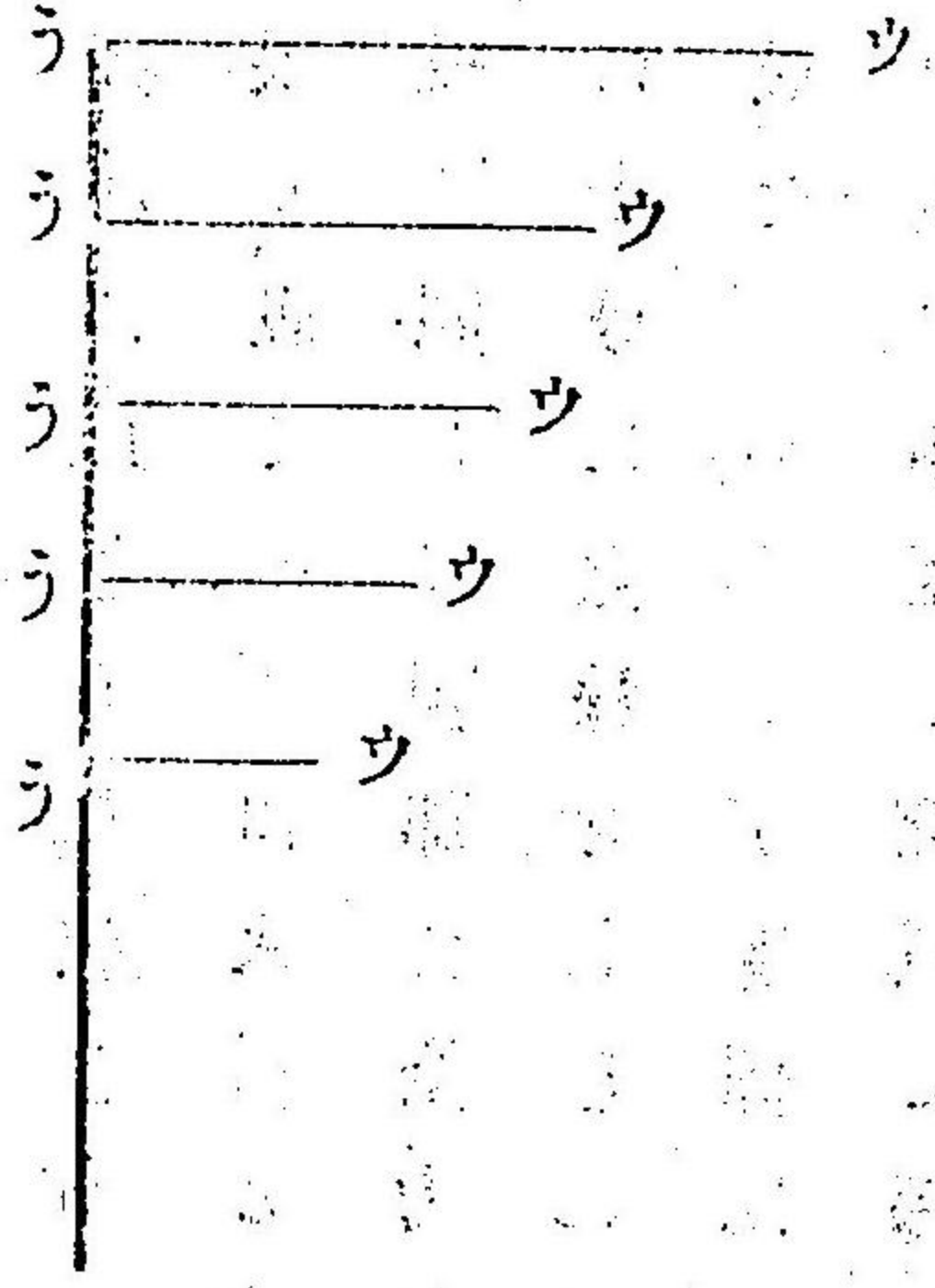
方法には圖の如くウよりウに

至る鞭を以て其の線の上を靜

になづるものとす。其れに彼等

の被教育者の心に注意を集む

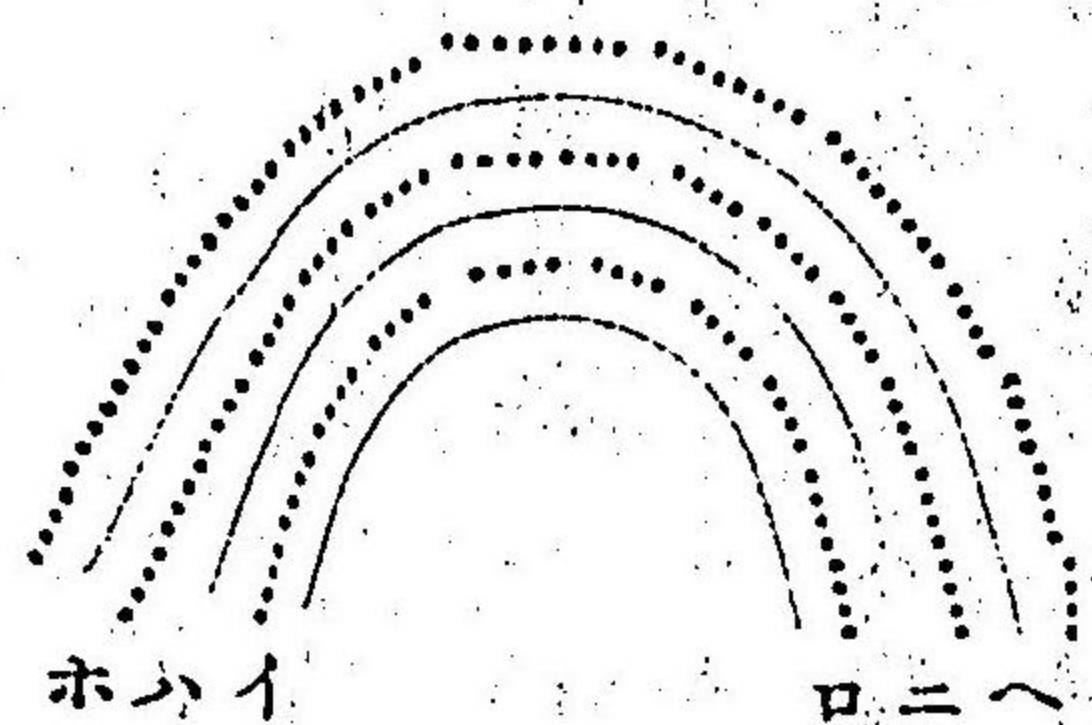
ることとせよ。



ウの發言に長さあり短きあり。是れに全呼吸をなさせ、音聲  
 續く限り、成るべく出來得る丈け、力のあらん限り、經續的に  
 深呼吸と同じに腹部に全力を注いで腹膜呼吸せしめ、是の  
 運動に十分に熟練せしむれば彼等に必要な健實なる思考  
 を構成せしめらる。丁度禪宗の方では座禪と云ふて居る其  
 法式の様な体度と位置で深呼吸を成さしむ、さすれば必ず  
 彼等の劣等兒低能兒であつても數回となく、時間を利用し  
 て、矯正せしむることなれば、彼等にこの矯正か出來るので  
 ある。これ道德的觀念の基礎が体格に影響することの關係  
 組織である。犯罪心理學を研究して見ると。凡ての犯罪の多  
 くは体格の劣等のものに多く、これで犯罪人の呼吸は何れ  
 も不完全な呼吸作用である。この矯正は不良少年にも低能  
 兒にも勿論成年にも何れの人々にも健康上必要なる方法

であると思ふ。

(三) 思想小より大の心練 低能兒は何れも數學的思考に不  
 完全である。これが如何なる原因であるか、と謂へば吾人は  
 斯く實驗上よりこの原因を知ることか出來る。これと謂ふ  
 ものは觀念構成の不十分と分解の知識がない爲めである  
 これを作り立つるにはこの方法が必要である。  
 イ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、この曲線に被教育者に鞭をさつて目に見つ



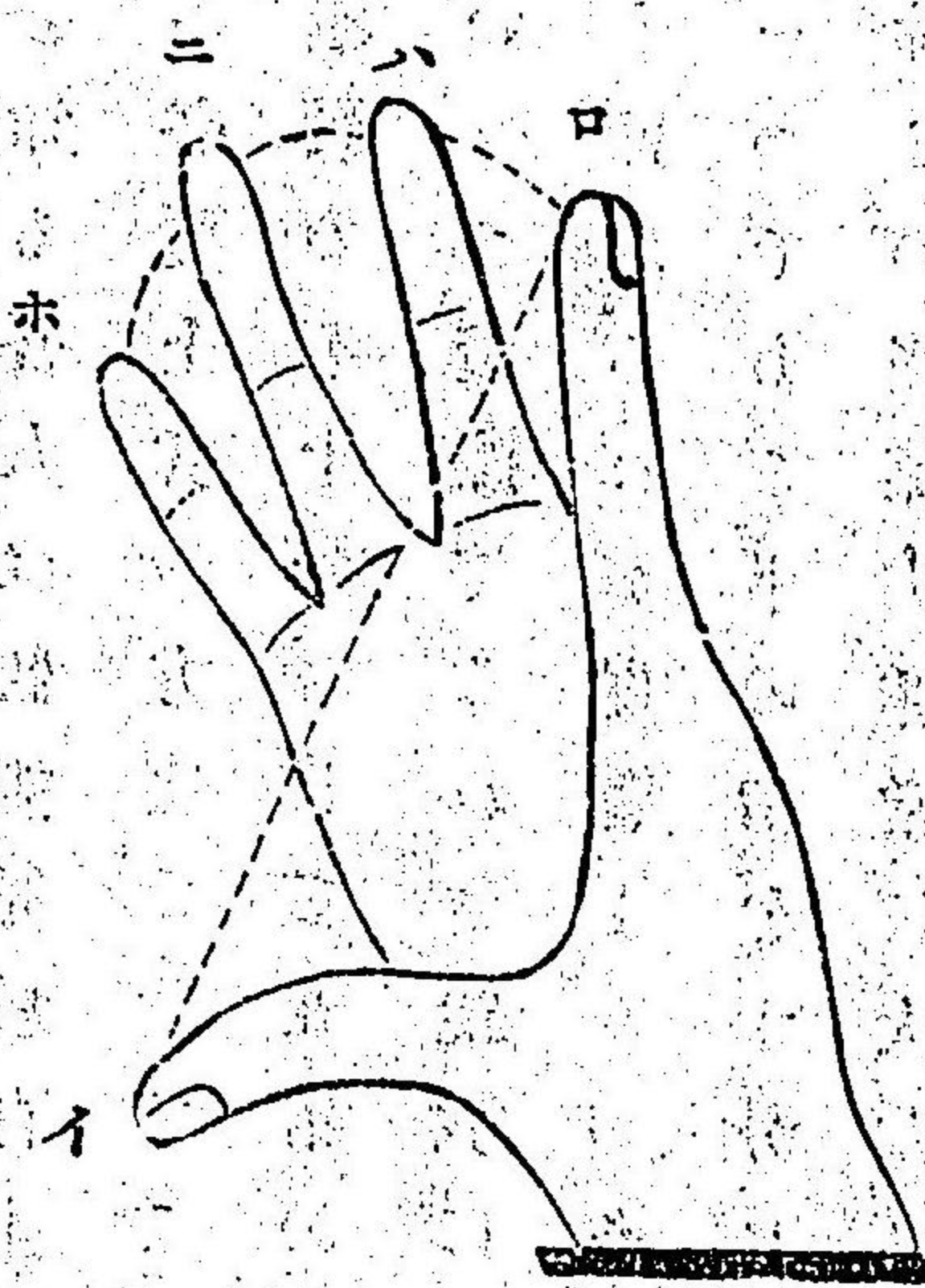
めさせ、この注意をはらはせ静かに  
 この上をなつる。其間の点線に 1 2 3  
 4 5 6 7 8 ……と數へさせて 1 2 3 4  
 ……と數へさするのでこの心練を何回  
 ……となく、これを行ふ。單純なる觀念より  
 復雜なる數の觀念を構成せしむるも

のさす。この法式には「云ふを數、より無數と云ふ知識に導き遂に無數、無限偉大と云ふ形而上意識を作り出さしむ。これ哲學的に謂いばデカルト哲學とカント哲學と一つまゝとめにしたるものである。彼等に教育上必要なものとして偉大なる人物を想像せしめこれに追へ慕ふ様に向土敬虔の念徳性を發起せしめ偉大なる人格に要求せしめ、彼等が理想をして幾分かつ、幼稚ながら彼等の情操的教育の原理になり基礎になる様と、したいとの余の希望にて、この心練は低能兒教育上缺く可らざる道德性の開展に必要として吾人はこの点に全力を注いで、研究すべきものとす。この心練を以て不良少年、低能兒、とをして教育上尤も有力なる教育法である。吾人はこゝと思ふ。この心練を學ぶ上にこの精神基礎を造る確實にさせたく思ふ。

### 第三章 皮膚より心練

余の低能兒研究の結果前に述べた兒童心理學の現象として、こゝに皮膚の兒童に對する實驗は五管より、何れよりも刺劇完成たる感覺機管として重なるものとは、吾人はこれを知る吾人は低能兒教育上必要なものとして、この研究の必要上其の方法として、こゝに低能兒の手指は如何せん運動の不十分にして五指の運動力が弱い。これが腦力の弱い一つ證據でこれを鋭敏に運動さすることの必要であると思ふ。これが皮膚よりの心練として、尤も必要なもの、一つである。手の指を十分に繪の如く開かしむこの力と精神との關係が非常に大なる腦力に關係することなれば、これを努力と熱心、至誠との具体教育の主要なることなれば

これを十分に教ゆることが必要である。これが精神に努力の模型にしてこれが低能児に精神教育はこゝに一齊を含蓄してあるのでこの意識を説明せば十分に開くと云ふことはこれ位い意志の動を顯はすものはない、其れに他の手を以てイよりロに他の人指でイロの直線を静にすべらしむること、これが精神の統一を全ふしめロよりハよりニよりホと云ふ風に努力、熱心、至誠この具体的教訓に達せしむることに必要なものであつて、吾人はこの價値は凡の心練中にて尤も必要な又價値あるものとして認め得るものである。



(二)皮膚と感覺運動にして、右の手の諸指(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)と左の指の(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)との間に相互關の感覺を練習せし得るものとする。この方法としては、心内の知覺と現象に於ける數的現象をして深く、思想的に動かしむることの爲めに先づ眼子を閉さして、數を數へしむこれ如何なる方法を取るべきか。この運動として(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)と(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)との指の合せ置きしものを一つ置きに指を右と左との指に(ロ)と(ろ)に靜かに離らしめ、次に(ニ)と(に)とに離らしめ、前の(ロ)と(ろ)とは既に指をつけしめ、置く様にして相互の間に一つ置き一つ置きに、運動せしめば、この心的作用よりして、彼等の低能児に數算法の發育せしむること易く。この運動をして活發に且つ練習の結果次第に両手の各指が運動が敏速になるので、これを練習する事により練習をつむに從

つて發育して、必ず健全なるものになる。この熟練せしむることに従つて、腦の發育を見るに得たるへし。この心練の仕事は、小指に十分の力を注いで、親指に力を入れて、中の三指をして軽く運動せしめて、(ロ)(ハ)(ニ)の三つの知覺をして、この作用の敏速なる運動をなさしむ。1 2 3 4 5との唱へしめて、運動をなさしむへし。

この心練は、吾人の想像の練習にして、手の指の筋をして、神經の作用を以て、鋭敏にせしめ、この運動にして、この十二分に、腦の作用をして、思想的完全の感覺を起さしむるに、必要なるもの爲めに、精神の開展上必要と認むるものに、其の運動の静にせしめ、感覺作用をして、腦の反射作用の十分に發育させやふ、この方針にて、想像の練習より、自然と想像的運動と、連想との活潑なる運動の出來る様に、具つこれにより

數的觀念を構成せしめ、右掌對左掌、合掌、左右の諸指、親指より、始め(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)對(い)(ろ)(は)(に)(ほ)の相互的交叉的運動を目を鎖して、(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)の合掌、諸指靜かに1、2、3、4、5、と唱へさせ、心的印象(ハ)の相互の中指の絶頂より、(イ)(ロ)(ハ)(ニ)の順序に、大、小、長、短、觀念の知覺的より、想像と連想とに、綿密な關係を練習せしむる方法にて、1、2、3、4、5、と相互の離れさせ、合せしめ、前の相互的交叉的運動を數回となく行はしめ、最後に腦の靜正を持つて、再び合掌せしめ止む。



## 結 論

低能兒とは如何なるものか、勿論教育學の名稱であるかも知らんが、單に教育家の見知よりのみ見るべきものにあらず。これを醫學の知識の立場より論すべきものでもある。ここに吾人の研究すべきものは先天的の白癡、癡愚、輕癡の三種に別かたば教育すべき名稱には白癡には白癡教育あり、低能兒教育とは輕度の癡愚と輕癡智性缺損と有するものにはこれらを教育すべきものを低能兒教育と云ふ。ことに於て施すべき低能兒教育について、特別級支けの補助にては尙ほ完全なる教育とは思はれぬ。余は自ら進んでこの教育上に當らんとして、研究して見た所この準備學として勿論必習學として實驗心理學の必要あり、兒童心理學、精神病

學、哲學、宗教、教育病理學、普通教育は勿論である。この事業は國家健全なる國民を育つる事の基礎の一つである。この必要なる低能兒教育の必要を感じ余は獨立低能兒教育として、治療教育法の一として心理學を以て根柢より改造せしめんとして、こゝに心練なるものゝ研究は將來國民一般に精神教育上缺く可らざるものと認められたく、何せなれば何れの人類にして、幼稚なるものには具體的教育の必要である如く。吾人の低能兒教育に對する教育の研究には、この根本的治療的教育が到底出來ぬものと確定したらんには低能兒は一生可憐兒として不幸と禍とにあるべきか、必ずこの低能兒教育の補助教育のみならず進んでは、この低能兒教育の根本的治療的教育に全力を注いで努力すべきものゝ國民的犠牲に富む人々のこれが爲めに起らん事を願ふ

不省なる身なるが根本的心的作用に至るまでこれを以て  
心練法を利用して改造治療教育の實驗と多少の經驗とを  
以て、この方の教育を成すの必要と感ぢ可憐兒の爲めこの  
一生を低能兒教育の研究に従事し、以て他くまで心練の實  
施と共に低能兒教育の發達を謀る。

心練學終

附 録

獨逸國のエーナのトリューベル氏教育院では次のやうな  
個性調査票を用いて居られた(富士川遊氏教育病理學より)

兒童の個人検査表、

氏名 年齢

入所の月日

甲遺傳の關係

一、兒童の名

生年月日

生産地

二、父の名

職業、地位、族籍、宗教、住處、

三、母の名

職業、地位、族籍、宗教、住所、

四、両親は尙ほ生存するか

五、両親若し存せざれば、後見人の名

職業 住所

六、兄弟姉妹の数は如何

本人は第何番目なるか

兄弟姉妹の中にて生存せるものは

同じく死亡せるものは

年齢、男女、死因

その身体及精神状態は健康なりしか

生存せるものゝ身体及精神は健康なるか

若し然らざれば其疾患は如何

其他精神特性に善良又は不良のものありや

身体に特徴又は缺損あるや

両親は侏儒、尙僕、又は癡愚の小供を生みしか

兄弟の中に運動障得に悩むもの又は悩みしものあ

るか、

(無蹈病、震戦、痙攣性不安、痙攣、歪顔等)

七、両親は尙ほ生存するか

若し生存せざるれば、其年齢及び死因は如何

八、祖父母は尙ほ生存するか

若し生存せざれば、其年齢及び死因は如何

父系の祖父、父系祖母、母系の祖父、母系の祖母

九、父は如何の業務を執れるか

母は如何の業務を執れるが、職業過度なるが、その模

様は如何、両親の社会的地位から何等かの害を小供

に及ぼせるか

十、該兒童は醉中に受胎せしものと想像すべき理由あり

や又は他の疾患的或は遺傳的狀態を認め得べきか

十一、兩親の中の一人が該兒童出産前に、酒精を濫用せしことあるか、

或は煙草、阿片、莫兒比涅、其他の強刺戟品を濫用せしことあるか

祖父母は此獸に就ては如何

十二、兩親の中の一人が該兒童出産前に精神病又は神經病

癡痺狂の如きに罹りしことあるか

鬱憂狂、躁狂、痴呆、癲癩、ヒステリー、無踏病、神經衰弱、頭

痛、偏頭痛、神經痛等に罹りしことあるか

若しこれあれば、兩親の中のいづれにてその種類は

如何

祖父母、父母の中に才能卓越のものあるか

祖父母、父母の中に體質病に罹れるものあるか

結核、腺病、甲狀腺腫、關節癱瘓質斯、微毒、匂行疹、近視、失明、聾等の疾婁病に罹れるものあるか

十三、祖父母、又は父母の兄弟姉妹の中に上記身体及び精神病に罹れるものあるか

若しあらば、誰にて、その状態は如何

十四、父母は近親なるか若し近親ならばその續き合ひは如何

乙、胎生時素因及發育の關係

十五、生殖時に於ける父の状態

生計の困難、苦悶、又は窮乏ありしか

或は贅澤、奢侈の生活をなせるか  
 不良なる道徳的或は身体的特性若しくは慣習を有せしか  
 身体及び精神の病的状態或は精神の是常現象を有せしか、  
 微毒に感染せしことありしか  
 何か放恣の生活をなせしか  
 夫婦は和合せり不和なりや  
 十六、受胎の時、又は妊孕の間、母に上記の事項のいづれが存在せしか  
 其他異常の状態が發呈せしか  
 打撲墜落等によりこの身体震盪、恐怖、苦悶、心痛苦慮、  
 等  
 疾病、珈琲、酒類茶、或は他の興奮性飲料の濫用、不眠に

悩みしが、頭痛又は脊痛に悩みしか、其度数は如何、  
 鬱憂又は他の精神異常状態に悩みしか妊孕の際、異常の障礙を蒙むりや  
 コルセット類にて腹中胎兒をいためしことありや、  
 十七、婉産は如何に經過せしか  
 丙 學齡以前の兒童の發育  
 十八、婉産に際しての兒童の状態  
 十九、榮養  
 二十、兒童の養護は如何の状態なりしか  
 二十一、榮養状態は如何なりしか  
 二十二、兒童が其他に罹りたる疾病は如何、何時これに罹りしか、その不良結果は何如か  
 二十三、齒牙發生は何時始まりしか

- 三十四、種痘は何回施せしか、何時施せしか
- 三十五、汚穢
- 三十六、運動の發育
- 三十七、遊戯慾は如何に發達せしか
- 三十八、模倣(突、歌ひ、話、舉動)
- 三十九、温覺の發達に就ては、何が注目せられしか
- 四十、觸覺につきては何が注目せられしか
- 四十一、痛覺につきては何が注目せられしか
- 四十二、嗅覺につきては何が注目せられしか
- 四十三、味覺につきては何が注目せられしか
- 四十四、聽神の發達につきて觀察せられしか
- 四十五、言語の發達につきて觀察せらるることは如何
- 四十六、視神の異常を呈せしか

- 三十七、色を區別せしは何時に始まれるか
- 三十八、形体神の發育は如何
- 三十九、鉛筆を以て書くことを始めしは何時か
- 四十、計數神の發達は如何
- 四十一、時間觀念の發達は如何
- 四十二、倫理觀念及び宗教觀念の成立に就ての觀察は如何
- 四十三、記憶の領域は如何
- 四十四、上記のどの場合に於て想像を交へて話せしか
- 四十五、思考作用の發達は如何
- 四十六、第四十三項に擧げたる事項の何れに注目觀察及び趣味を有せるか
- 四十七、覺官感覺及び全体感覺に病的状態を呈せるか
- 四十八、客易に疲勞を覺わしか

四九、情緒の刺戟性、衰弱を徴せしか

五十、情緒及び意思の發達に於て、別に注目すべき事項あり

五一、宗教的感情は何時、如何に起りしか

五二、特別の習慣ありや何時より始まりしか

五三、何等の仕事を學びしか

五四、幼稚園に入りしか

五五、書字及讀書を試みしか

五六、小學校に入りしか

264  
973

明治四十四年五月十三日印刷  
明治四十四年五月十五日發行

不許  
複製

著者 水戶市上市田見小路六百二十八番地  
川田貞治郎

發行者 水戶市上市南町四百三十七番地  
熊谷猛太郎

印刷所 水戶監獄

發賣所 水戶市上市南町四百三十七番地  
寺田書店



